「東京は渋谷に来ております」におけるハの用法に関する一考察

専修大学　顧滌非（こてきひ）

地名を表す表現として「東京浅草」「神奈川・箱根」「大阪の堺市」が挙げられる。しかし、『世界の果てまでイッテQ』という番組では「東京は神田に来ております」のような「場所Aハ場所B」（以下「AはB」）という形がしばしば見受けられる。本来「ノ」で良かったところになぜ「ハ」が使用されているのだろうかと発表者は疑問を抱いてきた。

「AはB」の主な先行研究として菅野（1964）、諸星（2000）、竹林（2001）、福間（2004）が挙げられる。菅野（1964）は「は」の機能について分析しているのに対し、諸星（2000）は史的変遷と位相の面から「AはB」を検討している。そして竹林（2001）と福間（2004）では「AはB」の構造を中心に考察が行われている。しかし、これらの研究は内省による考察が中心で、コーパスを用いた量的研究がまだ見当たらない。そこで本研究はコーパスを用いて「AはB」型表現の現代日本語における使用実態を明らかにする。

本研究のきっかけは番組での会話であったため、発表者はまず『日本語日常会話コーパス』および『名大会話コーパス』を調べたが、対象となる用例がなかった。そこで規模の大きい『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いることにした。抽出データは 5982 件で、すべての用例を目視した結果、146 件が考察対象となった。これらの用例を対象に、発表者は以下の五つの視点ⅰ）「ハ」と共起する名詞の特徴、ⅱ）後接する助詞、ⅲ「AはB」に共起する動詞および転成名詞、ⅳ）使用文体、ⅴ）使用場面から考察を行った。

具体的な結果は以下の五点が挙げられる。

①「AはB」における前項名詞が「東京」に集中し、後項名詞は特定の場所に集中しない傾向にある。また前項名詞「A」については、「市」より広い「国・大陸」「地域・都道府県」などの地名が用いられることが多いが、稀に「商店街」のような狭い地域の場合もある。

②「A は B」に後接する助詞は連体助詞「の」の場合が圧倒的に多く、この表現はさらに「の」をつけて後続する名詞に対する性質を示すことが多い。

③共起する動詞および転成名詞について諸星（2000）が提示した 1.移動を表す語、2.出生・出身を表す語、3.所在・存在を表す語に偏っているという結論を再確認することができた。

④該当用例数から、「AはB」型表現は話し言葉の性質を持つものと見なすことができる。

⑤使用場面は「出身を告げる」「移動または所在状況」「紹介場面」に分けることができ、多くの先行研究で注目を浴びた「東京は神田の生まれ」という「出身を告げる」場面の使用は少なく、「紹介場面」の使用のほうが多い。

主な参考文献

竹林一志（2001）「「東京は神田の生まれだ」型表現と助詞「は」」『表現研究』73、表現学会、pp.16-22

菅野宏（1964）「東京は神田の生まれ」森岡健二他編『口語文法講座』明治書院、pp.254-263

福間真由美（2004）「「東京は神田の生まれです」の構造」『国文研究』49、熊本女子大学国文談話会、pp.33-45

諸星美智直（2000）「現代語における助詞「は」の特殊な用法ー「上州は新田郡三日月村の生まれ」をめぐってー」『国語研究』63 、國學院大學国語研究会、pp.87-104